

学校通信

学校生活における大切なお知らせです

||
2026 Nov.
第 282 号

学校長からのメッセージ

未来の日本は、親と子どもだけで暮らす「核家族」から、さらに一人暮らしなどの「個人単位」へと家族の形が小さくなり、個人の生活が便利になる一方で、人とのつながりが薄れて「孤独」を感じる人が増える時代になると言われています。また、多様な背景や国籍を持つ人々とともに生きていく「多文化共生」の時代でもあります。

人とつながり、互いの違いを認め合って生きていく力は、教科書を読むだけでなく、実際の体験を通してこそ身につくものです。高校生活は単に知識を得るだけでなく、人間の土台を築いていく貴重な機会です。

ある女子生徒の話です。かつて集団になじめず深く傷ついていた彼女は、本校への転入学前の面談で「自分の寿命は20歳まででいい」と静かに打ち明けてくれました。人間関係に深く苦しんでいた彼女ですが、諦めず本校の「人との関わりやつながり」を大切にすることを経験しながら、誰かと比べることなく自分のペースで歩み始めました。

家族の支えや見守る大人たちに励まされ、自分の体験を語る場や音楽の演奏、プレゼンテーションなどの「表現する場」へ少しずつ挑戦していくうちに、彼女の表情は豊かになり、かけがえのない友人もできました。卒業の際、彼女は「100歳まで生きたい」と話してくれました。不安や苦しみでいっぱいだった人とのつながりが、本校での温かな体験によって上書きされた瞬間でした。

先日久しぶりに学校を訪ねてくれた際、大学進学後も順風満帆とはいかず苦勞したことや、演劇や奏楽ボランティア等の活動がとても充実していることを教えてくれました。そして今は「来世もまた生きたい」と思えるほど、前向きに人生を歩んでいます。

「人は人を浴びて人になる」という言葉があります。人は人から傷つくこともありますが、癒やされ、本来の自分を取り戻して成長していくのもまた、人との「あいだ」においてです。本校には出会いと語らいの場がたくさんあり、一人ひとりのペースで可能性を広げられる学びがあります。焦る必要も、誰かと比べる必要もありません。ここにはあなたを応援する大人がたくさんいます。どうか孤独の中に留まらず、温かな連帯を選んでください。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」 ローマの信徒への手紙 12章 15節

＊参考資料：『孤独・孤立の実態把握に関する全国調査』

国立社会保障・人口問題研究所『日本の世帯数の将来推計』

(校長 池田 博人)





今月の聖句

「あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出した時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。」

(イザヤ書 46 章 3-4 節)

25歳のクリスマスの日、わたしは家で倒れました。何の予兆もなく、気づいたら床に横になっていました。受け身も取れず、顔から床に倒れていたの、あごの周りの感覚がなく、口からは血が流れていました。突然のことで怖くなった私は、生まれて初めて大きな病院で脳と心臓を中心に精密検査を受けました。

採血をはじめ、心電図、MRIなどの様々な検査を受けたのですが原因は分からず、とうとう最後のエコー検査を受けました。ここで私は、はじめて「自分の心臓」が動いているのを目の当たりにしたのです。こぶし大の筋肉の塊が、次の瞬間勢いよく広がっては、また収縮する。物心ついた頃から、「体の中心には心臓があって、これが動いているから自分は生きている」ということは頭では知っていました。しかし、目の前にあるそれは、規則正しく脈打つ独立した生き物のようで、映し出されていた青黒いモニターに、わたしはしばし声もなく見入っていました。

この出来事を通して、私は「自分を越えた存在に支えられている」ことを実感しました。私の心臓は私の体の一部なのに、私の思うように動いているわけではない。逆に、私が良い時も悪い時も、母の胎にいた時も年を重ねた今も、充実した時を享受しているときも、この世から消え去りたいと願った時も、一度も止まらずに動き続けている。

今月の聖句は、母の胎内にいた時から自分の足で立てなくなって老年に至るまで、神が一度もあなたの手を離さず背負い続けてきたと告げています。私たちは、ともすると「自分は一人で生きている」と考えてしまうことがありますが、実は気づかないだけで様々な存在によって「最初から今に至るまで背負われていた」のかもしれない。



「今月の聖句」 自己紹介

森山 徹(もりやま とおる)

Yチャレンジコース2年次の担任と、Yリンクコースの担当をしています。

好きなことは、読書(マンガ含)とスポーツ観戦と休日の二度寝。聖書の言葉や物語の魅力を少しでも共有できればと思っています。

